

STAGE

AMUSEMENT SQUARE

演劇空間「スペースベン」

見る目、見られる目

△文／スペースベン代表・田中 勉▽

十一月にイージーシアター我楽多屋が行った「超・我楽多屋」月間公演も幕を閉じた。昨年の十一月に引続いての月間公演であるが、今年は五週間五作品・金・土曜日の計十ステージが行われた。

彼等は何を見出し、何を見出さなかったのか？詳細なる劇評は来月誰かにしていただくこととして、今月は「目」について少し書かせて頂きたい。社会人として、職場において見る「目」見られる「目」。家庭人として、家庭内において見る「目」見られる「目」。人それぞれ、状況、立場の微妙な変化によって、少しづつ見る「目」見られる「目」を変えながら、バランス感覚を保ちながら生活しているのだから。

もちろん、そういう事にかかわらず自分の道を好きなように生きていってしまっている。私もそこまで人の生き方に口をはさむことは出来ないし、しようとも思わないが、少なからずバランス感覚を欠いていることは否めない事実ではなからうか。

最近、テレビでもラジオでも同じような人生相談を耳にする。夫が子供達を近くの公園に、忙しいと言って連れ

て行ってもくれないという。それに對して相談員は言う。「公園で家族で遊んでいる光景は憧れであって、実際の家族は幸せであるかどうかはわからない」。従ってもう少しガマンすべしだ。確かにそうであろう。そのとおりに思う。しかしながらそういう事に悩み、潰れていく人間が何と多い事か。もしかしたら、相談員の先生方は公園に行ったこともなく、更にはそういうささやかな努力をしている人間の微妙な気持ちさえも分からないのではなからうか？ただ単に話を聞いて欲しくて相談する人も結構いるが、本当に道を探している人の「目」と、それを聞く人の「目」にギャップがあるのは当然の事かもしれないが、非常に辛い事なのかもしれない。

むりやりこじつける気はないが、芝居においても、演出の「目」と、役者の「目」と、観客の「目」にギャップがあるのは当然の事かもしれないが、それを潰さなくてはいいものは創れないのかもしれない。

先日、下田で行われた「アウシユビツツ展」を観に行った。いつかのデーリー東北のこだま欄にも載っていたが

子供を処刑するか、強制労働させるかの判定に使用した百二十センチのバーには、同じく子供を持つ親として、強烈な衝撃と、言い知れない不安を感じた。そこには、上の男の子が達しているホッとする反面、達していない下の女の子を悲痛な「目」で見ている自分がいた。恐ろしきで、その会場を一刻も早く出たくなった。

世の中には確かに薬もあり毒もあるからいいのかもしれないが、その時代、そこに生きる人達の「目」が、いかに的確で、いかに恐ろしいものなのかを、みせつけられたような気持ちで一杯であった。

十二月のFANS番組

※いずれも午後七時半開演

入場料五百円

●六日(第一四八回)

「タイトル未定」

作・演出／鈴木利典

出演／鈴木利典

豊川郁宏

●十三日(第一四九回)

「定義」

作・演出／小屋敷暁

出演／小屋敷暁

浅坂忠実

柏崎真由美

新沼館タケル

久保優美子

●二十日(第一五〇回)

「フンころがし、転がされる」

作・演出／平霞健悦

出演／ドク……中田正拓

ユキ……平霞健悦

●二十七日(第一五二回)

「勝手に忘年会」

構成／木村勝一・朝顔乱白

※FANSを観た事がある方

ならどなたでも。

FANS番外編

●二十二日(日)

西高生によるライブ有り

●二十三日(月・祭日)

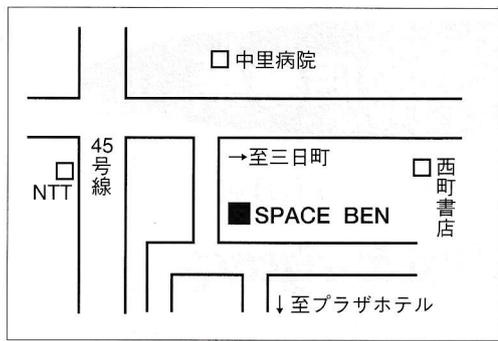
北高生による演劇公演有り

※午後二時開演

〈問い合わせ〉

〒031 八戸市柏崎一十二一八

TEL&FAX 0178(43)9876



車でのご来場はご遠慮ください(近くに西町書店駐車場有)